

大分県 現代俳句協会 会報

第120号

令和2年8月25日



現代俳句歳時記 【百日草（ヒャクニチソウ）】

キク科の植物でコスモスやダリアと同郷のメキシコ原産。初夏から晩秋まで花をつける。掲句は百日草の属性を頑固だと言っているように見せかけ、実は自分の生き方を描いている点が面白い。

百日草がんにがんに住んでいる 坪内稔典

豊後大野市三重町にある豊肥本線菅尾駅は、令和二年三月十七日で開業百年を迎えました。

菅尾駅は大正十年三月二十七日に当時の大飼軽便線の菅尾駅として出発。昭和五十八年に無人駅となりました。その後旧国鉄に代わり市が駅舎を所有しましたが、平成十七年の駅舎改築以来ほとんど改修されていません。そのため天井材の剥がれが

何度も交渉を重ねてきました。その結果、駅舎の西側の掲示板を狩野句会で使わせてもらうことが決まりました。

狩野句会では会報百十三号で紹介した、昭和二十一年より活動している現代俳句の草分け的俳句会です。かつては協会元会長の足立雅泉氏（故人）が会長を務め、現在は当協会副会長の上田たかし氏が引き継い

豊肥本線「菅尾駅」 掲示板で「三重町狩野句会」紹介 開業100周年記念駅舎リニューアル



目立ち、駅舎のベンチは腐食が進んでいました。

このため地域おこし団体である「三重まちづくり協議会」が、行政に頼らず住民が主体となつて菅尾駅を改修しようと、開業百周年に合わせて取り組みを行ってきました。

地域に居住する当協会員の佐藤哲夫氏は、日常的に地域活動に貢献していましたが、この菅尾駅百周年を現代俳句の紹介と普及に役立てることはできないかと、



でいます。会員は現在21名。そのうち10名が協会員です。入会直後の新人から40年以上在籍している人まで、新陳代謝が絶えず行われています。

菅尾駅の掲示板は「狩野句会の一」と題する写真による狩野句会の紹介、興味を持った方への体験入会のすすめ、及び毎月の句会から注目

郷土の駅で郷土の句会にふれて欲しい

佐藤 哲夫

いし、やつと東側の全面が使えることになりました。使

地域の事業に積極的に関わってきたので、菅尾駅百周年の改修工事が決まったときは本当に嬉しく思いました。私なりに新しい菅尾駅にたいして何ができるか真剣に考えてみました。その結果私が属している現代俳句の楽しみを多くの人に知って欲しいという結論に達しました。

掲示板は地域の人の連絡のためにあるので、私の一存ではどうにもなりません。掲示板に関わっている責任者の方、何人かに連絡を取り、腹を割ってお願



代の女性が真剣に掲示板を見ているのに遭遇しました。掲示板を読んでいる人はこの方だけではないでしょう。小さな試みですが無駄ではないという確信を持つことができました。

句を選び、初めての人でも分かりやすいように鑑賞の手引きを一緒に掲載しています。菅尾駅は無人駅とはいえ、平均して毎日三百八十人ほどが乗降しています。

七月の注目句は以下の通りです。

捨てられぬ日傘を差せば影は母

佐藤とし子

(鑑賞) 母の遺した日傘は、あれから長い時間が経ってしまった今でも捨てられずにいる。お洒落なレースは、いつのまにか私の実年齢より若くなってしまう。思い切つてその日傘をさす。すると強い日射しで、傘をさした私の影が地面にくつきりと浮かぶ。ああ、その影はあの日の母の影と全く同じだ。

ひとり身を強がる日々よ合歡の花

清田 幸子

(鑑賞) 連れ合いを亡くし孤独が身に沁みるが、それだけに家族や友人に心配はかけられない。「私は大丈夫」と胸を張りながら生きている。しかし気丈に振る舞っても、どうしようもない絶望感に襲われることも多い。そんな私を、気がつけば合歡の花が見守ってくれている。連れ合いと同じ優しい笑顔で。

駒走松恵さん
第四句集「末の娘終焉」

本協会員で令和元年五月に百一才で逝去された駒走松恵さんの第四句集です。この本は末娘の幸谷恵子さんが、松恵さんの生存中に何とか間に合わせたという思いで発行した、いわば「駒走松恵集大成」といえる本です。WA主宰の岸マチ子氏が序文を書いていきます。

娘さんの幸谷恵子さんは、九重在住で、先日河野輝暉顧問の推薦で当協会に入会しました。

沖繩忌母は生涯海の色
八月をみつめつづける火の柱
神無月いまだ辺野古の海は碧
蜘蛛の囀にふわりとのりてまた余生
秋扇九十年の風の神



第1回雑詠句会 高得点句

《14点句（2句）》

雛の灯を消して少女を卒業す
田水張りこの満月と旅に出る

足立 攝
有村 王志

《12点句（2句）》

さわさわと枯葉が嘘をつく日暮
農婦には農婦の美学冬苺

佐藤 珠幸
鎌倉真由美

《11点句（4句）》

春雷を切り取っている自動ドア
鬼やらい仮面の下はまた仮面
小春日や愚直に生きし父の椅子
一瞬にしてみな遺品二月ゆく

上田 たかし
上田 たかし
平田 千代子
梶原 千代

《9点句（1句）》

春濤にただよう民意辺野古崎

七草を摘む指先に今朝の息

田中 充

河野 則子

《8点句（2句）》

初暦掛けて万物動き出す

初音きく野山は風の通り道

神 慶子

永松左世美

初蝶来失くせしものを探すかに

湯豆腐の夜のぬくもり介護棟

西峯 峰子

福井トミ子

《7点句（7句）》

ゆたんぼの響きが好きで入れている

菜の花をぬけて届かぬ母のむね

油布 晃

足立 町子

薄氷を夜空と思う鯉の口

白水 風子

《6点句（8句）》

帰省子や露味噲馬刺だんご汁

井元 扇岳

廃線が運んだ兵と文化の灯

坂本 一光

原爆を落した国の傘の下

坂本 一光

てのひらに海を浮かべてより彼岸

平田千代子

サイタサイタサクラが散った戦世に

下司 正昭

老妻に押し切られしは春のせい

宮崎 山景

夫の手を借り春泥を渡りきる

飯田 幸子

決断の出来ぬまゝ落ち熟柿かな

有村 王志

《5点句（7句）》

まだ胆に寒夕焼けが居るらしい

田口 辰郎

マスクから少し笑顔が覗いている

田口 辰郎

喉仏持たぬ女が雑煮食ぶ

河野 則子

初恋の色に似ている春の風邪

足立 攝

表札の無くなりし家冬の梅

吉田 素子

二目目の夫のカレーや花曇

稲田久美子

肩ポンと押して二月を送りけり

白水 風子

《4点句（11句）》

過ぎてゆく雲は時間よ蟬蚪の国

河野 輝暉

雑炊がことばの壁を低くする

上田 たかし

揚雲雀むかし男は戦場に

足立 攝

春雨や核の傘より出られない

梶原 千代

「ありがとう」ことばのシャワー浴

赤嶺 信子

年明くる九条しつかり守らねば

灘波 瑞枝

人はみな一筋の煙曼珠沙華

灘波 瑞枝

白梅の空を静かに掃いている

神 慶子

炊きたてのごはん目刺は二匹欲し

宮崎 山景

静寂の中の鼓動や芽吹山

白水 風子

葬送の見上げる空やなぜ青い

児玉 利子

※以上4点句まで掲載しました。詳しくは句会報10号に。

第23回

大分県現代俳句協会賞

応募締切10月20日

応募ください。

〈応募要項〉

応募資格…県協会員であること

(同賞受賞者は除く)

作品…20句一組(一人一編限り、

タイトルを付加すること。令和元年10月～令和2年9月の作品。既発表、未発表は問わない)

応募用紙…横方向縦書きのA4原稿

用紙使用のこと(ワープロもこれに準ずる)。誰でも読める字で書き、右の欄外にタイトル、左の欄外に氏名(俳号)を明記する。

締切…10月20日(火) 消印有効

応募料…2千円・必ず作品に同封すること

送り先…事務局(足立) まで

選者…成清正之、河野輝暉、谷川彰啓、有村王志(選考委員長)、

あべまさる、上田たかし、白水風子、伊藤利恵(8人)

注意事項…作品は一句一句の出来映えの他に、20句一組のタイトルを含んだ完成度も選考の対象になります。

・応募後の訂正には応じられません。返却はしないので、必要ならコピーを取ってください。

・選考は、条件を揃えるために作者名を伏せ、活字化して選者に渡します。活字化の際は十分注意し

県協会の活動が本部に紹介されました

第28回定期総会以降「県協会の影響力を大きくする」活動が強められています。協会本部はこの取り組みを取り上げ、全国に紹介しています。

たとえば本部ホームページの「地区活動」では、昨年10月の三重町吟行大会での足立撮影幹事長の講演「著作権と俳句作品・添削された俳句は先生の作品か生徒の作品か」を全文紹介しているほか、後藤章組組織部長の「時々再々」では、県協会の入会パンフレット等を取り上げ、「大分県現代俳句協会が俳句初心者

ますが、難読が原因による打ち間違いは、応募者の責任とします。
・令和元年10月～令和2年9月の作品に限るという規定は、少しでも違反すると失格になるというほど厳密なものではありませんが、著しい違反は減点になります。
・すでに評価の定まった作品(大きな大会の上位入賞句等)の応募は違反ではありませんが、あまり数が多いと減点の場合があります。

向けの新たな活動を始めました。写真はそのパンフレットと小冊子です。『俳句読本』は足立撮影さんがまとめた。よくできた初心者向けの案内本です。このような積極的な取り組みは素敵です!がんばれ大分!とエールを送っています。

大分県現代俳句協会に拍手!

大分県現代俳句協会が俳句初心者向けの新たな活動を始めました。

下の写真はそのパンフレットと小冊子です。
『俳句読本』は足立 撮影さんがまとめた。
よくできた初心者向けの案内本です。



後藤章組組織部長「時々刻々」

「私と俳句」 田口 辰郎

鹿児島県志布志市の遙か山奥の田舎村で育った私は、文学とはまるで縁のない少年期を送った。鹿児島の大雄大な山河の中で遊びに夢中の毎日だった。

一方私の父は、文学に非常に熱心な人で、朝日新聞の懸賞論文で入賞したことから、朝日新聞社と親密になっていた。当時、朝日新聞嘱託の地方記者として、支局にニュースを送り続けていた。

父は何でも夢中になる人で、「ちよつ



と今、家の前を通ったのお父さんじゃないの？」と母が気づき、私が追っかけて見ると、やつぱり考え事をしながらどんどん遠ざかる父の背中だった。笑い話のようだがこれは誇張ではない。母はそんな父にすっかり慣れっこになっていた。

その父が晩年、俳句を始めた。もともと人付き合いは苦手な質で、句会には入らずに、独学で句作していたのだろう。独学の割に、現在の私が見てもそこそこの腕前だと思う。

NHK俳句に入選したほどだから表現力はあったのだろう。

その頃には子どもは独立して、妹は宮崎に、そして私は大分に住んでいた。父は八十を越える頃から体調を崩すようになり、そんな時は薩摩人らしく焼酎で紛らわせる。そうすると酒量が増えて行き、妹が度々駆けつけることになった。困ったときは私に、「言うことを聞かないから何とかしてよ」と泣きついてきた。

そこで私が自分の近況を、見よう見まねで五七五にして送ると、父から俳句に対する辛辣な批評が、長々と送り返されてくるようになった。

俳句の話をしているときの父は実に楽しそうで、しばらくは見違えるように元氣を取り戻した。俳句とはこんなに人を元氣にする力があるのかと、漠然と思った。これが私が最初

に俳句と関わった出来事である。父が九十六歳で亡くなつてからは、私は仕事一筋の人生を送った。七十歳を過ぎて仕事が一段落するようになると、これから何をして過ごすのか、深刻な課題となった。友人たち

ちに相談しても「今まで何もして来なかつたのに急に出来るものではない」と、つれない返事である。そんなとき、ふとしたきっかけで俳画に出会った。

俳画なら下手なりの味わいの画が出来ると、早速飛びついた。やはり父親の遺伝子を受け継いでいるのだろう。それまで趣味らしきものを持っていなかったから、すっかりのめり込んでしまった。

の俳句に感動したからとか、誰々に誘われたからとか答えるだろう。しかし私の場合はその時の流れで、ずるずると俳句らしいものを作り始めたのである。

我ながら貧しいスタートだと思つが、その後の展開が、非常に幸運であつた。平成二十三年、大分県現代俳句二十周年大会がトキハ会館で開催された。県協会への初投句「入道雲持上げタンカー現るる」が宇多喜代子本部会長(当時)と谷川彰啓副会長(当時)の特選句に選ばれたのだ。勉強したいと申し出た私に谷川彰啓さんは、それならと成清正之先生を紹介してくれたのである。

成清先生を塾長とした俳句道場「雲」、また天籟通信の流れを汲む「大分句会」に入会し、最初から高いレベルで俳句を学ぶことができるようになった。とは言え、他の会員はですでに九州内で活躍されている人ばかりで、二、三年はまるでついていけなかつた。

しかし元来「聞くは一時の恥」的な性格の私であるので、そのことが幸いした。三百六十度どこを向いても俳句を教わる人ばかりの環境に恵まれた事に、感謝するばかりである。入会の時に成清先生に言われた「三

年は俳句を語れませんよ」の言葉通り、分からないことばかりであったが、最近になって少しづつ俳句を理解できるようになった気がする。

絵とか書道は、素人でもそれなりの価値は分かるものだが、俳句の場合、正直言って自分の作品であっても確かな評価は出来ない。結局、自分はどう思うかでなく、他人の評価を甘受しなければならぬ。その点について真摯に向き合おうと自分を戒めている。

《新会員紹介》

時松由美子（九重）

春泥や女の歩巾目で測る

甲斐 順子（九重）

年重ね見えるもの有り臈月

桐野 力（九重）

八月の空地下足袋の履き具合

幸谷 恵子（九重）

捨て石は捨て石のまま沖繩忌

※幸谷さんは先日百一才で（逝去された）駒走松恵さんの娘さんです

ただ、私なりに自分の目指すところはある。それは「発見」である。従来の俳句をそのまま継承するのではなく、新しい形の俳句、自分自身の俳句を作ろうという夢をいつも持ち続けている。もちろん決まった言語空間の中であるから、飛び抜けた「事象」があるわけではないが、俳句を大きく広い視野で見ることが私の目標とする視点である。今年は句歴十年になる。「発見の年」になることができればありがたい。

《寄付及び発展基金振込》

（二口千円です。受付中）

・河野 輝暉 氏

十口

・甲斐 素純 氏

十口

・菅 勲 氏

五口

（以上30th大会お祝儀として）

・谷川 彰啓 氏

五口

・久枝 花城 氏

二口

・飯田 幸子 氏

二口

・倉迫 順子 氏

十口

・伊藤 利恵 氏

五十口

・菅 攝子 氏

五口

・甲斐加代子 氏

三口

・加藤 征孝 氏

二口

・佐藤 哲夫 氏

三口

・神 慶子 氏

三口

・白水 風子 氏

五口

・大神 愛子 氏

三口

・平田千代子 氏

二口

・宮川三保子 氏

三口

・匿名希望

二口

《事務局より》

◇創立30周年の記念イベントのため、県協会の一般会計及び発展基金をほぼ使い尽くした旨の幹事会報告を総会で行いました。すると多くの方からの寄付が相次ぎ、総額10万円を越えました。協会が多くの方から支えられていることを改めて実感しました。ご協力に感謝します。一部を一般会計の活動費に充て、残りを発展基金に繰り入れました。

◇新型コロナウイルス騒動で、総会決定である日田吟行大会（6月）が中止になったほか、幹事会などあらゆる活動が制限されています。そのため今号の会報の記事が著しく少なくなっています。一方、人が集まらなくてすむ雑詠句会等の記事を載せた句会報を充実させました。併せてごらんください。コロナとの兼ね合いで徐々に活動を広げていきます。

令和2年 自薦作品募集

◇自薦作品4句を、ハガキ、FAX、メール等でお送りください。

◇締切は10月10日（土）消印有効

◇宛先は事務局まで

◇同封の第2回雑詠句会の選句用紙を使ってもOKです。

令和二年八月二十五日発行
会報第百二十号

発行人・有村 王志

発行所・大分県現代俳句協会

編集人・足立 攝



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net